

書評と紹介

Hussein Ali Abdulsater, *Shi'i Doctrine, Mu'tazili Theology:*

al-Sharīf al-Murtaḍā and Imami Discourse

Edinburgh: Edinburgh University Press, 2017, vii+246 pp.

平野貴大

Takahiro HIRANO

本書は、11世紀を代表するイマーム派の合理主義的潮流の学者の1人であるシャリーフ・ムルタダー (al-Sharīf al-Murtaḍā, d. 436/1044) の神学的教説を体系的に分析した研究書である。著者の Abdulsater はこれまで11世紀のイマーム派の合理主義的潮流の神学思想を研究してきており、本書は著者のこれまでの研究成果の集大成とも言い得るものである。

11世紀初頭はイマーム派思想史上の大きな転換点であった。10世紀末までのイマーム派においてはクルアーンとハディースの文言に忠実に従い、理性的推論を極力排除した伝承主義的潮流が主流であった。それに対し、11世紀初頭に活躍したシャイフ・ムフィード (al-Shaykh al-Mufid, d. 413/1022) の登場以降、伝承のみならず理性的推論にも重きを置いた合理主義的潮流がイマーム派の中で支配的となった。ムフィード以降、彼の弟子であったムルタダー、及びムフィードとムルタダーに師事したシャイフ・トゥースィー (Shaykh al-Tā'ifa al-Tūsī, d.460/1067) によって、合理主義的潮流が体系化されていったと言われている。

11世紀のイマーム派神学においては、ムウタズィラ学派の影響がしばしば指摘されてきた。欧米研究の通説では、ムフィードはムウタズィラ学派の中でもバグダード学派の教説を採用し、ムルタダーは師とは異なりムウタズィラ学派のバスラ学派の教説を採用したと言われている (52, 56頁)。Abdulsater によれば、一般的にスナ派の人物伝ではムフィードやトゥースィーがムウタズィラ学派の学者として分類されることはないものの、ムルタダーはしばしばムウタズィラ学派の学者、もしくはムウタズィラ学派に傾倒した学者として扱われているという (23頁)。本書は、ムルタダーの思想をムフィード、トゥースィー、さらにムルタダーと同時代のバスラ学派の神学者アブドゥルジャッバール ('Abd al-Jabbār b. Aḥmad, d. 415/1024) の神学思想と比較することで、イマーム派とムウタズィラ学派との関係性という観点からムルタダーの神学上の貢献を明らかにすることを目的としている (9-11頁)。以下に各章の内容と特徴をまとめ、その後に評者の所見を述べることとする。

本書の目次は以下の通りである。

序論

第1章 生涯と著作

第2章 神と世界

第3章 善悪論⁽¹⁾と神の正義

第4章 人間と宗教的体験の起源

第5章 イマーム論と道徳的指導者の必要性

第6章 預言者論の神の導きの価値

結論

第1章では、ムルタダーの生涯と彼の著作についての概説が為されている。一般にムルタダーは神学者として有名であるが、本章ではムルタダーの神学者以外の側面も紹介されている。ムルタダーは彼の弟シャリーフ・ラディー (al-Sharīf al-Raḍī, d.406/1015) からターリブ家のナキーブ職 (naqīb) を継承しイマーム派共同体の中で政治的な役割を果たすのみならず、彼の師ムフィードの没後は当時のイマーム派を代表する神学者となったという (18-19 頁)。生前からムルタダーは優れた詩人としても知られており、また、法学者としての著作も残っている。以上のようなムルタダーの経歴と業績を簡潔にまとめた後に、第1章の後半では本書の主要な資料であるムルタダーの著作についての説明が為される。本書は *al-Amālī*, *al-Dhakhīra*, *al-Mulakkhkhaṣ*, *al-Dharī'a*, *al-Shāfi'ī al-Imāma*, *Tanzīh al-Anbiyā'* というムルタダーの6つの代表作を主要な資料としている。これら6つの著作のうち *al-Dharī'a* だけが法源論を扱う著作であるが、残りの5つは神学の主題を中心に扱う著作である。ただし、本書全体ではムルタダーの14の著作からの引用が為されており、上記6つの主要資料以外のムルタダーの著作からの引用回数は非常に多い⁽²⁾。

第2章では、世界の創造と神のタウヒード (tawhīd) に関わる教義が分析されている。神や世界の構造を理解する前提として、本章はまずムルタダーの認識論の分析から始まり、その後、ムルタダーの世界論の分析に入る。著者によれば、世界が空間を占める実体 (jawhar) と実体に宿る偶有 ('araḍ) から成り立つ、などといったムルタダーの基本的な主張は神学者の間で広く共有されるものであるが、細かな論点を見るとムルタダーの思想はバスラ学派の教説に非常に近いという (52 頁)。本章の後半では、ムルタダーの神学における神の存在証明、属性論が分析されている。著者によれば、属性論においてはムルタダーとムフィードとの間で決定的な相違があり、それはムルタダーが属性論の代わりにバスラ学派の「状態 (ahwāl)」論を採用していることであるという (71-73 頁)。

著者によれば、ムフィードの教説がバグダード学派に近かったのに対して、ムルタダーの世界論、神の属性論はバスラ学派の思想と非常に近いという。そして、トゥースィーはムフィードの学説ではなく、ムルタダーの学説を継承しているという。このことから、ムルタダーがイマーム派神学において新たな局面を生み出したという結論が導き出されている (79-80 頁)。

⁽¹⁾ 原文では *moral theory* とされているが、本書での意味合いは直訳の「道徳哲学」というより「善悪論」に近いと考えて訳出した。

⁽²⁾ 本書で分析対象とされている主要6文献以外のムルタダーの著作は、*Dīwān al-Sharīf al-Murtaḍā*, *al-Intiṣār*, *Masā'il al-Nāṣiriyyāt*, *Mawsū'a Turāth al-Sayyid al-Murtaḍā*, *al-Mūdiḥ*, *al-Muqni'*, *Risāla al-Sharīf al-Murtaḍā*, *Sharḥ Jumal al-'Ilm wa-al-'Amal* である。

第3章では、善悪論と神の正義（‘adl）の関係が分析されている。「神の正義」とはムウタズィラ学派の5原則、及びイマーム派の5信（タウヒード、神の正義、預言者位、イマーム位、来世）の中に含まれており、イマーム派神学とムウタズィラ学派においては重要概念である。神の正義の理論は、人間の行う悪が神に帰されるかどうかという問題に直結する。

第3章はまずムルタダーによる人間の行為の分類法、及び善悪論を分析して、それを通じてムルタダーにとっての善悪判定の基準は来世の賞罰の有無であることを指摘する（119頁）。次いで、本章では神の正義に関する分析が為される。ムルタダーの教説は、神から人間への義務付与であるタクリーフ（taklif）と、「個々人がタクリーフを果たすために最良の物理的・精神的状態を用意するという神の干渉」を意味するルトフ（lutf）というムウタズィラ学派の概念が重要であるという。ルトフやタクリーフに基づく議論においてはバスラ学派の主張を支持するムルタダーと、バグダード学派を支持するムフィードとの間で様々な相違点が挙げられている（98, 120頁）。

ただし、ムフィードとムルタダーはともに、預言者とイマームたちの執り成し（shafā'a）を承認し、ムウタズィラ学派の5原則のうちワアド（wa‘d）とワイド（wa‘id）の2つを否定することによって、ムウタズィラ学派とは一線を画しているという（119頁）。第3章の分析を通じて、神の正義の議論においても、バグダード学派に近いムフィードとバスラ学派に近いムルタダーは多くの問題で対立し、トゥースィーは多くの問題でムルタダーの学説を採用しているということが指摘される（120頁）。

第4章では人間論、および、人間と神との関係性が分析されている。人間論については、人間を人間たらしめる定義、及び、人間の行為者性が主題となっている。人間論においても多くの主題でムフィードとムルタダーの見解が対立しており、その見解の相違の一部はムフィードがイマーム派伝承の中での用語法に依拠していたのに対し、ムルタダーは伝承をほとんど考慮せずバスラ学派の見解を取り入れたことに拠るといえる。例えば、ムフィードはバスラ学派を除く全てのムスリムの合意に基づいて、人間が自身の行為に対して起こす作用を「創造（khalq）」とは呼ばないという。トゥースィーもムフィードの用法に従うが、ムルタダーはそれを「創造」と明言しているという（133頁）。

本章では人間論と行為者性の議論の次に、タクリーフの議論をもとに神と人間との関係性が扱われている。ムルタダーの主張のほとんどはバスラ学派の教説に一致するというが、理性と啓示の関係性においてはムルタダーの思想にイマーム派性が見出されるという。ムルタダーによれば、人間は知ることが義務であるようなものを理性によって知ることができるが、人間にはそれを怠る傾向があるため、導き手としてのイマームの存在が不可欠である。理性と啓示の関係性についてもムルタダーとムフィードの間に見解があるものの、タクリーフの遂行のためにイマームが不可欠であるという点においては、両者は同意しているという（142-143頁）。

第5章ではムルタダーのイマーム論が検討されている。彼のイマーム論における神学的貢献は、イマーム派の従来の議論を組み替え、神のルトフというムウタズィラ学派の概念をイマーム論の中に導入し、イマームを置くことを神のルトフと位置付けることによって、イマームの存在が信徒の来世における利益のために必然であると見なしたことであるという（154頁）。著者が

まとめるところによれば、ムルタダーの幽隠 (ghayba) 論においては、イマームの幽隠は「不在」ではなく、「偏在 (ubiquitous presence)」のようであり、信仰者は常にイマームを恐れることで、義務行為をより実践するようになるという。幽隠によってイマーム位の役割が弱まらないどころか、より大きくなったというムルタダーの幽隠論の特徴を著者は指摘する (170-171 頁)。

イマーム論を巡ってもムフィードとムルタダーの間には様々な相違点があるが、ムルタダーはイマームの知識が非宗教的な事柄に及ぶことを否定し、また、幽隠によってイマーム位の役目がより大きくなるという独自の教義を主張した。トゥースィーはムルタダーの多くの学説を継承していたが、イマーム派の通説とは異なるこの2つの学説は支持しなかったという (173 頁)。

第6章では、イマーム論を扱う第5章に対応する形でムルタダーの預言者論が検討されている。預言者論においてはムルタダーとムフィードの間に大きな相違点はあまりないようであるが、預言者の定義やサルファ (sarfa) 論 (これについては後述する) などにおいて両者の見解が異なっているということも Abdulsater は指摘する。ムルタダーの預言者論においては、イマームと預言者の違いは啓示受容能力の有無にあるという。ムルタダーはイマームという概念が預言者を包括するものであるとし、預言者はみなイマームであるが、イマームは必ずしも預言者ではないと見なす。その結果、ムルタダーの論理によれば、神の言葉を受け取る役目を果たした後の預言者の役割は、イマームの役割と同様のものとなる (182, 204 頁)。Abdulsater は、ムルタダーとは対照的なムフィードの伝承重視の姿勢を指摘する。預言者とイマームを別の概念として扱うムルタダーに対して、ムフィードはイマームと預言者の間の概念的区別を否定しているという。ムフィードの論理によれば、イマームが「預言者」とは呼ばれない理由は伝承によって彼らを「預言者」と呼ぶことが禁じられているからに過ぎないという (183 頁)。

Abdulsater は、ムルタダーの預言者論における特徴にサルファ論を挙げる。クルアーンの奇跡としての模倣不可能性は一般的にクルアーン自体の表現や修辞という観点も含むが、サルファ論に立脚することでムルタダーがそれを否定していることが本章で明らかにされる。ムルタダーによれば、当時のアラブがクルアーンを模倣できなかつたのは、彼らが模倣する能力を持ちながらも神の干渉によって模倣することが不可能となったからであるという。これがサルファ論であり、Absulsater は、ムルタダーのサルファ論はムフィードやトゥースィーの見解と対立すると指摘する。

結論部分では、以上の6章の論点を整理し、ムルタダーとムフィード、トゥースィー、およびバスラ学派のアブドゥルジャッバールとの比較の観点からムルタダーの独自性と貢献を示した。ムルタダーは非常に多くの教義においてバスラ学派に近い立場をとったが、イマーム派のイマーム論に関わり得る教説ではバスラ学派の概念を援用することで、イマーム派の立場を正統化しようとしたという。この意味で、ムルタダーがムウタズィラ学派の概念を用いてイマーム派の教説を再構成したということも、著者はムルタダーの神学上の貢献として評価している (215, 218 頁)。また、ムルタダーがイマーム派伝承の明文に反するような場合を除いて、彼のほとんどの学説はトゥースィーに継承されたことが判明し、ムルタダーの神学が後世のイマーム派に継承されたことが示された。

以下、評者なりの所見を述べていきたい。内容の評価に入る前に、本書の使用資料に関する評価を述べておきたい。本書ではムルタダーの神学書はもちろんのこと、彼の法学書やクルアーン解釈書など合計で14の彼の思想書が分析対象とされている。前述のように、本書はムルタダーの著作の中でも主要6文献を中心に分析しているものの、他8つの文献からの引用回数も非常に多い。管見の限り、ムルタダーの思想を考察した研究書や論文の中でこれほどまで網羅的に彼の文献を調査したものは存在しない。そのため、本書はムルタダーの神学の全体像を網羅的な文献調査から明らかにした最初の研究として位置づけることができるだろう。さらに本書は、ムフィードの15の著作、トゥースィーの11の著作、アブドゥルジャッバールの現存する唯一の神学書における神学思想を比較対象とすることで、ムルタダーの思想の特徴を解明することに成功している。

本書の扱う内容は多岐に渡っており、様々な観点から本書の意義を指摘することができるだろう。評者は初期のイマーム派思想研究の観点から、本書の功績を2点に集約することができると考えている。1つ目の功績は、本書によってムルタダーの神学の全体像、及び彼の神学上の功績と独自性が明らかになったことである。本書全体の分析を通じて、ムルタダーの神学上の貢献、及び、彼の思想とバスラ学派との相違点、ムルタダーとムフィード、トゥースィーの思想の共通点と相違点が明らかになった。とりわけ、後世のイマーム派神学の基礎となったのがムルタダーの神学であったということは本書における最も重要な発見であると評者は考えている。

本書におけるこの発見は、これまで描かれてきたイマーム派思想史の記述に見直しを迫るものでもあるだろう。イマーム派思想史に関する従来の概説書・研究書では、ムルタダーの名前は必ずと言って良いほど言及されてきたものの彼の功績はあまり紹介されず、ムフィードやトゥースィーの思想史上の貢献が指摘されてきた⁽³⁾。ムルタダーの功績に関する言及が少なかった理由は、それがこれまで十分に研究されてこなかったことに拠る。そのため、本書における発見を踏まえて、今後のイマーム派思想史の概説書・研究書では、ムフィードやトゥースィーの功績も然ることながら、後世のイマーム派神学の基礎を打ち立てた神学者としてのムルタダーの貢献が紹介されることになるだろう。

本書における2つ目の功績は、11世紀におけるイマーム派神学とムウタズィラ学派との関係性に関する新たな視座を提示したことである。11世紀のイマーム派神学に関する研究の中では、イマーム派とムウタズィラ学派との関係性が欧米研究者とイマーム派学者たちとの間で大きな争点となってきた⁽⁴⁾。この問題については両陣営ともにある程度の説得力のある根拠を示してき

⁽³⁾ 最近のイマーム派通史の概説書では、A. Neman, *Twelver Shiism: Unity and Diversity in the Life of Islam, 632 to 1722* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2013), 及び、評者の拙稿「シーア派の歴史とイラン」(菊地達也編著『図説イスラム教の歴史』河出書房, 2017年, 59-78頁) などでは、ムフィードととりわけトゥースィーの後世への影響が強調され、ムルタダーの後世への影響はあまり言及されていない。

⁽⁴⁾ イマーム派によるムウタズィラ派採用論批判については、平野貴大「現代シーア派学者によるムウタズィラ派採用論批判の考察—ハーメネイーのムフィード (d.413/1022) 観に焦点をあてて—」(『一

たように思われる。確かに欧米研究者たちの指摘するように、11世紀の初頭になるイマーム派が理性的推論を積極的に行使するようになり、その結果非常に多くの教義をイマーム派とムウタズィラ学派が共有することになったのは事実である。そのため、イマーム派とムウタズィラ学派との間の影響関係を想定することには説得力があるように思われる。

しかしながら、イマーム派学者たちの指摘のように、ムフィードやムルタダー自身がムウタズィラ学派を積極的に批判し、自派とムウタズィラ学派との違いを主張していたことも事実である。そのため、あくまでもイマーム派とムウタズィラ学派は対立関係にあると想定することにもある程度の説得力があるだろう。

このような背景のもとで、Abdulsaterは最もムウタズィラ学派的傾向の強いムルタダーの著作の分析から、この問題を説明しようと試みている。Abdulsaterの分析によれば、ムルタダーはムウタズィラ学派の概念や方法論をそのまま導入したわけではなく、イマーム派の教説に合うように様々な修正を加えているという。そのため、ムルタダーは彼以前のイマーム派の主張をムウタズィラ学派のバスラ学派という合理主義的潮流の概念と方法論によってアップデートしようとしていたという(158, 171頁, 215頁)。著者によれば、ムフィードの認識するムウタズィラ学派とは「中間の立場(al-manzila bayna al-manzilatayn, 大罪を犯したムスリムを信仰者(mu'min)と不信仰者(kāfir)の中間の不義者(fāsiq)とみなす教義)」を奉じる徒のことであり、「中間の立場」という教義こそがイマーム論以外の側面においてイマーム派とムウタズィラ学派を識別する指標として認識されていたという(6, 213頁)。そして、この認識はムルタダーの神学の中にも継承されているという。

イマーム派とムウタズィラ学派との関係性についてのAbdulsaterの上の議論は、欧米研究者とイマーム派学者たちの両陣営において一定の説得力を持つものとして認識され得るだろう。著者は欧米研究の文献学の方法論を採用し、当時のイマーム派がムウタズィラ学派から多分に影響を受けて、多くの概念や教説を同学派から導入したという欧米研究の立場を支持している。それに対して他方では、イマーム派の教義を再構成するためにバスラ学派の概念や方法論を選択・修正して導入していたと主張することで、イマーム派学者たちの立場にも歩み寄っているように思われる。

最後に本書について評者がやや気になった点を2点挙げておきたい。1つ目は12代目イマームの死後に関するムルタダーの記述についての著者の評価である。幽隠中の12代目イマームの死後もタクリーフの義務は継続するという彼の思想に基づき、ムルタダーが12代目イマームを最後のイマームとは見なしていなかった可能性があるとして著者は主張する(166, 214頁)。しかしながら、評者は、ムルタダーのこの主張は「再来(raj'a)」の教義に関するものであると考える。イマーム派の伝承によれば、12代目イマームの再臨から最後の審判の日までの間に歴代のイマームらが現世に再来するとされる⁵。12代目イマームを最後のイマームであるという教義は10世紀半ばには確立しているため、ムルタダーの上記の主張は「十二イマーム派」思想の枠内におけ

神教世界』10, 2019年, 103頁, 110-113頁)を参照されたい。

⁵ M. A., Amir-Moezzi, *The Spirituality of Shi'ite Islam: Beliefs and Practices*, London: I.B. Tauris, 2011, 406-407.

るイマームたちの「再来」の教義に関するものであろう。

本書の2つ目の難点は、その高度な専門性と難解さであるだろう。本書の中にはイマーム派とムウタズィラ学派の専門用語が非常に多く言及されており、そのほとんどは詳細な意味の説明が為されていない。ムルタダーのアラビア語の原文も同時に参照しないと評者にとっては理解しがたい箇所が多かった。そのため、イマーム派の初期の教義にある程度の知識を持ちつつ、ムウタズィラ学派の基本的な教説を踏まえていなければ、本書の内容を理解することは難しいと思われる。しかしながら、このような内容の高度な専門性ゆえに、イマーム派思想研究者にとっては必読の研究書であると言える。

日本学術振興会特別研究員 PD

Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science